



月報 岡崎の教育

7月号

平成4年7月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会

「種を割っちゃったよ
ヒマワリの種って力もちだね」
ぎゅっと握った小さな手からつぼの種
「今日の空は元気がないね」
浮かぬ顔で見上げる曇り空

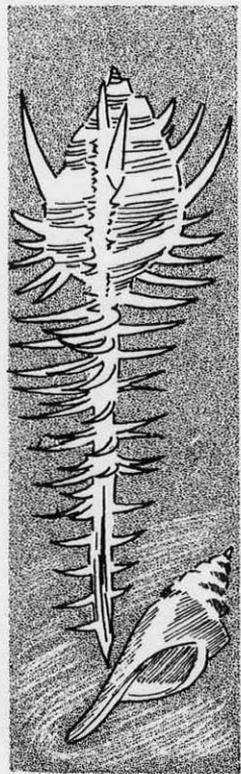
いつ、どこで見ても
すぐに、それとわかる一年生
背が低いからでもなく
新しいカバンだからでもない
好奇心をクモの巣のように張り巡らし
素朴な疑問をぶつける
何のとらわれもない素直な心

透明な感じで風に光る
雨上がりのクスの木に向かって
今日も子供たちはとび出していく
そして、手のひらいっぱい不思議と
夏に向かう目の輝きとをもって
帰ってくる

〈輝く瞳〉



(心をあわせて一梅園小)



和算以前の数学

聖徳学園岐阜教育大学教授

内藤 淳

日本の数学に関する最古の資料は、大化の改新の詔の中の、数学に秀でていた人を役人に採用せよ、である。具体的に書いてある最古の資料は、『養老律令』の中の、大学寮に算博士二人算生三十人を置く、である。教科書としては古代中国および朝鮮の算書九種類が用いられ、『九章算術』のような高度な本が含まれていた。

計算に必要な乗法九九は古く『万葉集』に見ることが出来る。例えば「九九八十一」にかかわる一節が卷十三にある。

仮名まじり文に直すと「玉こそは、緒の絶えぬれば、八十一りつつ、またも逢ふといへ、またもあはぬものは、つまにしありけり」である。「八十一」を「くく」と読ませ、「緒につないだ玉は緒が切れたらばくくりつけることができる。再び会うことができなものは別れた妻であ

る」がその大意である。八十一の外にも、このような戯訓が『万葉集』にあるから、奈良時代には既に九九が一般の人々の間で使われていたと考えられる。

平安時代には大学寮の制度が整っていたが、貴族の子弟は大学寮へ入らず家庭教師について勉強した。藤原爲光の長子松雄君の家庭教師になった源爲憲は七歳の歌の好きな松雄君が暗誦しやすいように、学ぶべきことを歌にして教科書「口遊」（くちずさみ）を作った。この中に九九八十一、八九七十二（略）一九九

八八六十四、七八五十六（略）一八八のようになり一二で終わる制限九九の表がある。完全な形で残っている九九表としてはわが国最古のものであって、中国から伝来したものである。末尾に「謂之九九」とあるから「九九」と言う熟語は一千年以上も前からあったことが分かる。

九九表の一部分が書いてあるものとして、奈良時代か平安時代のものと思われる木簡と紙片とが発見されている。

鎌倉時代の数学に関する資料は少ないが、建仁寺の中巖円月和尚や鴨長明等の著書で、禅僧が数学を学んでいたことを知ることができる。

室町時代の初期に作られた職員令の解説書によると、前述の『養老律令』と同様に、大学寮には算博士二人算生三十人を置き算博士は算生に算を教えること、と定めている。そして、「算というは九九を呼ぶことなり」とある。大学寮は官吏の養成所であるから高度な数学を教える必要はないにしても、数学が九九であるとはその低落振りに驚かされる。しかし、室町時代には江戸時代に引き継がれるほど面白い数学遊戯が数多く作られた。

江戸時代の初期にポルトガルの宣教師ロドリゲスは『日本大文典』を著した。その中に、日本人も使う西洋の九九として、一が一から九九八十一に至る制限九九の表がある。「口遊」の九九表と称する順序が逆であるこの九九表は『塵劫記』に採用され、わが国の九九表の主流になったが、伝来した時も経路も不明である。八十一個すべてを網羅する総九九の表が国定教科書に初めて採用されたのは大正十四年（一九二五）である。

低調であったわが国の数学であるが、江戸時代になると世界に類のない形態の数学である和算に発展するのである。（ないとう じゅん）



植物の生き方

六ツ美北中学校長

清水 厚治

「草木は時を知り、禽獣は心を知る」と言われます。「中日春秋」に紹介されたダービー優勝馬、ミホノブルボンの成育過程も、何か心温まる人と馬の心の通い合いを感じさせられます。

私たちの周りにある草花にも、非常に教育的な営みや現象を現すものがたくさんあります。それを知らずに過ごすのと神秘的な働きに目を向けるのとでは、日々の生活を積み重ねる上で、大きな違いが出てくるように思います。

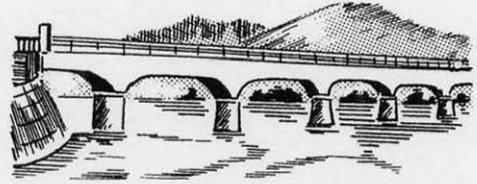
スマイレ（パンジー）は、不思議な能力をもっています。五月頃咲く花はあだ花で、実をつけません。

実をつけるのは、七月頃、花とは思えない青い蕾のようなものが伸び、自家受粉によつて実を作ります。やがて実は、はじけて四方に飛び散りますが、遠くに飛ばすことができません。種子が遠くに移動するための知恵がここにありま

ふるさとシリーズ

民謡

この人に聞く



池田智恵子 氏

家康公生誕四百五十年祭事業の一つとして、七月に岡崎五万石コンクール全国大会が催される。その会の運営やお弟子さんの指導に力を注いでみえる、民謡師歴二十年の藤本秀智栄こと池田智恵子さんのお宅をお訪ねした。

邦楽芸能一家に生まれた池田さんは、幼少の頃からお母さんに琴の手ほどきを受け、その音感のよさは周りの人が驚くほどであったそうである。

「今の子供たちは、難儀して覚えようと

しないですね。大人もそうです。私は、母から毎日本当に厳しく教え込まれました。今、お弟子さんはお客さんという感じですね。」

と、稽古の様子について語られた。大変はきはきしてみえる先生は、お母さんのとて厳しい教え方についていけなさと、十五歳の時、稽古から遠ざかるようになったという。終戦後、洋裁全盛の時期が来ると、先を読まれた先生は洋裁の道を選ばれ、仕事は多忙を極めたそうである。

既製品が出回るようになった頃、心の豊かさを求める時代が来ると確信され、琴や三味線への郷愁が甦り、三十七歳より民謡の稽古に取り組まれるようになったとのこと。昭和四十九年藤本流家元から師範を許され、秀智栄会を結成。以来二十年間、心のふるさとである民謡一筋に打ち込んでみえた。

「芸は自分のものにすればなくなりません。これは何物にもかえがたい財産なんです。他人の芸を盗んでも罪になりません。一つでも多く吸収するよう稽古に励んでもらいたいですね。」

こう言われる先生自身、今でも民謡の勉強に名古屋までお出かけになられるそうである。日本舞踊の稽古にも励まれる、時にはカラオケにも行かれるとか。昔ながらの民謡だけにこだわっているのではなく、現代的な感覚を取り入れた民謡を研究しなくてはと、常に前向きな姿勢で取り組んでみえる先生。生き生きとした

お話しぶりは本当に若々しく、七十歳になられたとお聞きしても信じられないほどであった。

「今、私のお弟子さんで一番若い人は中学三年で名取。最年長は八十七歳のおじいちゃん。庭師さんもいるし、大工さんもいます。年代や身分を超えて芸の道を学ぶ楽しさは何とも言えません。」町総代も務められたという先生。初対面の私たちにも明るく気さくに話しかけてくださり、そのお人柄に魅せられていく間に、いつしか時が過ぎてしまった。先程の雷雨に洗われた木々の緑がひときわ鮮やかに見えた。

氏名 いけだ ちえこ

生年月日 大正十一年七月三日

住所 岡崎市伊賀町南郷中五十九



にした虫によって距離を伸ばし、自分の生きる範囲を広げているのです。

熱帯の植物コチョウランが北海道で花をつけるという話を聞きました。不思議に思いませんか。植物は、生存の危険を感じ、子孫を残すために花をつけ、実を結ぶのです。

コチョウランは、熱帯で大雨が降った後、大気中の熱を蒸発によって奪われ、今まで三十度もあった所が、二十度以下だと危機を感じるのです。この現象を人が活用して、北海道で花を咲かせているのです。

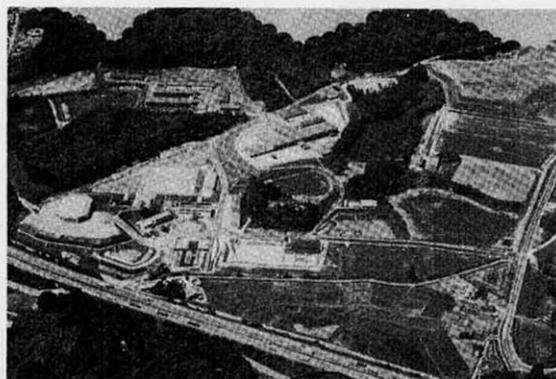
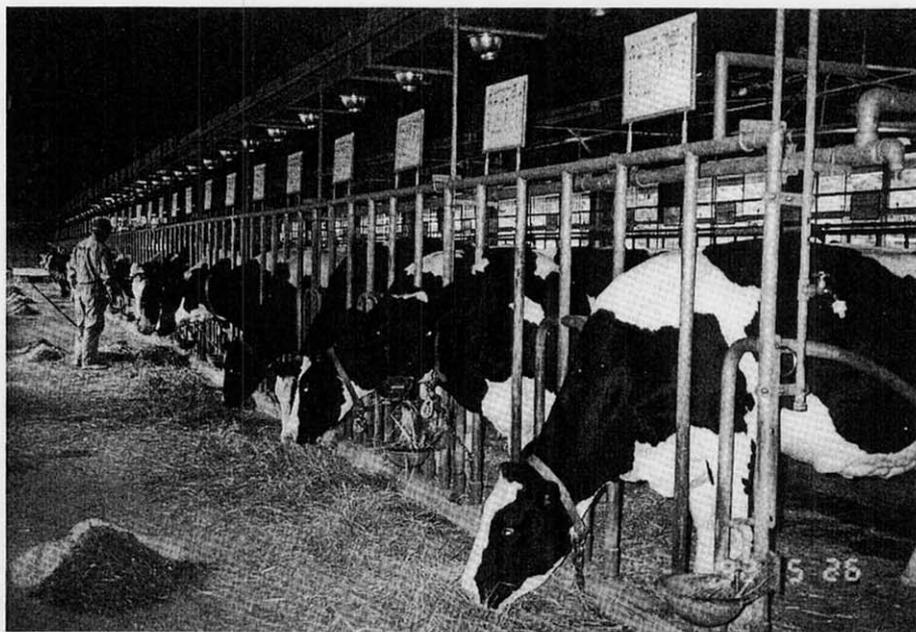
本校の南側にビニルのイチゴハウスがあります。十二月の寒い時期に実をつけさせるためには、それ以前に寒冷地で苗を育てたり、冷蔵庫で保管したりして寒気を体験させるのです。

人が逞しさを持つためには、植物のように緊張感を持つことが大切であり、苦しみや困難に遭った時、自己鍛練の機会として捉え、自分の思考を高めることが大切ではないでしょうか。

虞美人草（ヒナゲシ）は、蕾のうちは、うなだれていますが、花が咲く時には、天に向かって可憐な美しい花を咲かせます。

植物にしても、動物にしても、接する人の心の持ち方によって、学ぶべき多くの事柄を秘めています。所詮、一人では生きられない世界で、感謝の心と自己を見失わない努力こそが子供と共に伸びる教師であると思ひ、自戒しています。

開かれた 愛知県畜産総合センター

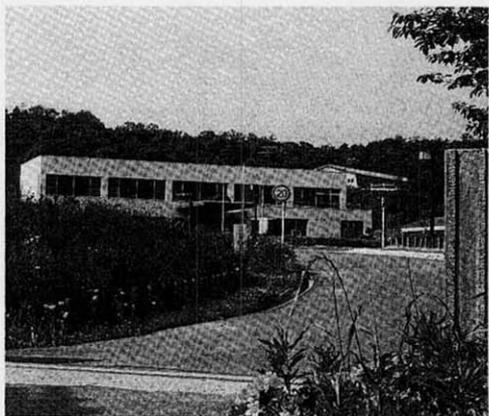


▲ 畜産総合センター全景 センター内では、とうもろこし等の飼料も栽培されている。

当センターは、丸山町の村上遺跡の西方に広がる丘陵地にある。今まで、「丸山の種畜場」という名で親しまれていた。

大正十二年十月、美合町に愛知県種畜場として業務を開始したが、昭和二十四年四月、現在地に移転した。そして、昭和六十二年四月から、時代の変化に対応すべく再整備に着手し、平成三年四月に、段戸山牧場や安城の種鶏センター等を組織統合し「愛知県畜産総合センター」と改称して再出発した。

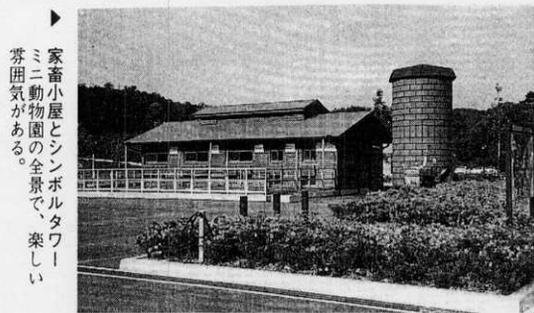
- 乳用種牛、肉用種牛、種豚等の増殖、育成及び譲渡
- 乳用種牛、種豚の能力の検定
- 家畜の人工妊娠
- 家畜の受精卵の生産及び譲渡



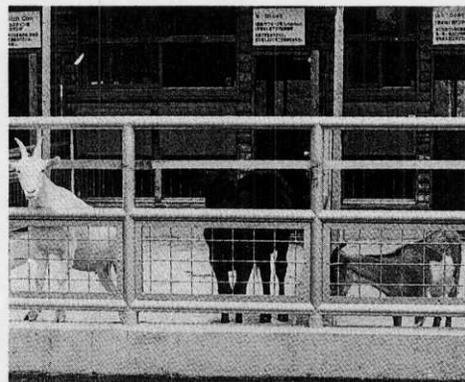
▲ 正門から見た本館 この正門のすぐ南側を東名高速道路が通っている。



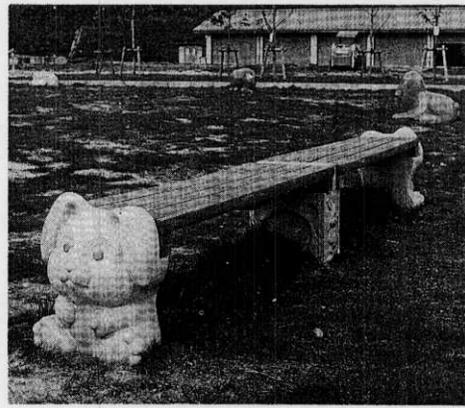
▲ 検査棟 ここで人工妊娠や受精卵の生産等が行われている。



▶ 家畜小屋とシンボルタワー
ミニ動物園の全景で、楽しい
雰囲気がある。



▶ 家畜たち 鶏、兎、山羊、羊など
様々な動物と触れ合える。



▶ ふれあい広場 様々な動物の形をした
ベンチが置かれた芝生広場。

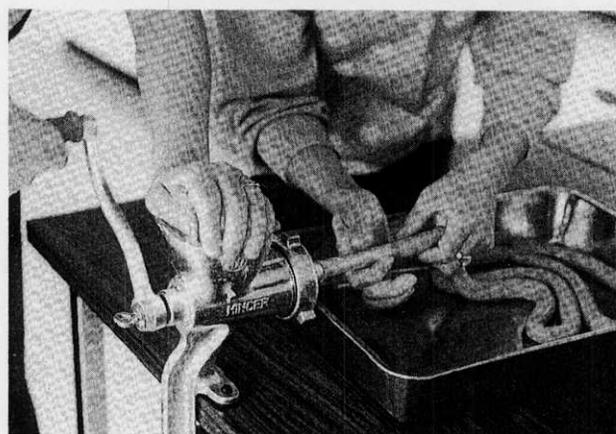


▶ 牛舎 優良品種の生産と
育成が行われている。

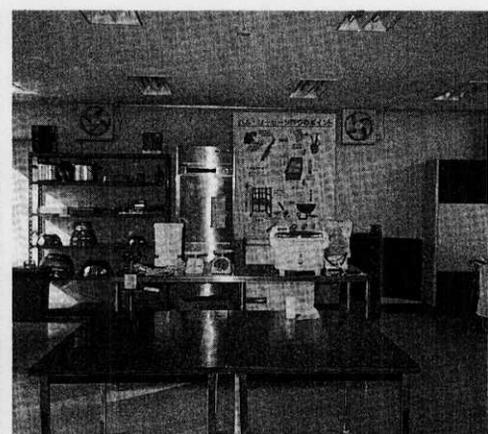


▶ サイロ 牛や豚の飼料がここ
に貯蔵されている。

・畜産技術の研修及び指導
などである。
本年五月末現在の保有頭数(本所分)は、
三千万円で輸入したミセスドリームランド、
ウォークアップ、クリアブリック三頭のドナ
ー牛をはじめ、乳牛七十頭、若牛三十頭、豚
種畜用四百頭、育成用四百頭である。
再出発したセンターの目玉の一つに、畜産
に関する知識の普及啓発を目的とした「ふれ
あいの場」が作られ、広く県民に開放されて
いる。そこでは、ハムやソーセージ等の畜産
物加工食品作りの体験コーナーや羊、山羊、
兎等に触れ合えるミニ動物園、各種スポー
ツの楽しめるドーム等があつて、多くの小中
生の利用が期待されている。



▲ 実習の様子 粗挽きソーセージ作りの実習の様子。費用は、
材料代だけでよい。



▲ 研修館内の実習室 実際に畜産物を加工する
実習が体験できる。



心を伝えるたすき

岩津小 平 任代

「ねえ、足痛くない？」

月曜日は、学年全員が極度の筋肉痛。三人の担任も足を引きずり卒業式の練習をした。筋肉痛の原因は、土曜日に開かれた「四二・一九五キロ走ろう会」。

この一年間、子供たちは、「卒業学年なんだから、みんなの心に残る一年にしたい」と、いろいろな会を学級会で話し合い、計画してきた。「学年スポーツ大会」をはじめ、「サマースクールスペシャル」と題して、カレーライス作りと肝だめしの会も、先生方や保護者の方々の協力を得て夏休みに開かれた。

そうしたお楽しみ集会の最後を飾るのが、この「四二・一九五キロ走ろう会」であった。

卒業式を控えた慌ただしい時ではあったが、会を支えて成功に導いたのは、何といつても子供たちの頑張りだった。記録係は、一人ひとりのタイムの平均値を求め、一周走ることの目標タイムを表にしていた。作成のために、E子はS子の家に泊まり込み、夜中までかかったとのことだった。

当日、学級旗をフェンスに掲げ、スタートした。一周交替でたすきを渡し、一人九周ないし一周周するという方法で行った。

「一周走れば一〇分程度休憩できるから」と、安易に考えていたが、三周したあたりで、気分が悪くなる者、足がつかない者が始まった。七周したころには、ほぼ全員が体の不調を訴えた。トラックの外で、友達のために、足をマッサージしたり水をくんできたりする子供の姿が見られる中で会が進んだ。

しかし、だれ一人力をゆるめるものはいなかった。学芸会で演じた「メロス」の心境だった。足を引きずりながらも、自分の番になると中継場所に足を運び、たすきを受け取って走って行く。

応援の輪が広がり、ほかの学級にも声援を送った。

アンカーのU男がゴールテープを目指して走ってくる。そこに書かれた「めざせ四二・一九五キロ」の文字が涙でかすんだ。「U男！U男！」精一杯の声で応援する級友に応えるように、U男が微笑んだ。記録は二時間一〇分一七秒。目標タイムを一分余り上回った。

ふれあい



緑の国際交流

刈谷・かりがね小

稲垣 幸一

「清代我向貴校児童・・・」
このような中国語や英語のエアメールが児童会のもとへ届くことがある。開封する子供たちの目は輝き、今度は、どんな植物の種が入っているのかと、期待に胸をふくらませる。

本校の児童会では、昨年度より「ぼくたちの緑を世界に広げよう」ぼくたちの手で、世界の緑を育てよう」を合言葉に、世界各地の小学校と種の交換を開始。それまでに、姉妹校として手紙や作品交換を進めてきたカナダの小学校をはじめとして、本校児童が在籍した外国の現地校・日本人学校・補習校など、七か国・十一校へメッセージとともに種を郵送した。

本校の木や草花の種を受け取った学校は、その趣旨に賛同し、現地の緑化活動の取り組みや、日本とは異なった環境緑化に対する試みを記した手紙とともに、日本では見られない珍しい木や草花の種を同封してくれる。中には、学校を超えて市の観光課までが種の収集や斡旋に協力してもらえた国もあり、その輪は、大きく広がっている。

外国からの種を受け取った子供たちは、一部を「種の銀行」(外国産専用)に保管した後、種まきを行う。もちろん、気候・風土が異なるため、全ての種が発芽するとは限らないが、それでも、少しでも現地の環境に近づけようと、家庭の温室を間借りさせてもらったり、ビニル掛けて保温をしたりと、可能な限

りの努力を惜しまない。

「この木は、秋に黄色のきれいな花を咲かせるんだよ。」

「この花は、国を代表する花で、とてもいい香りがするんだよ。」と、説明を加える帰国子女。

「ぼくたちの緑も、外国で元気に育っているかな。」

「緑を大切にしている心が世界中に広がっていくといいね。」

と、世話をしながら夢を語る児童会役員と国際交流クラブ員。

緑に親しむ活動から、子供たちが培う「豊かな心」は、確かに尊いものばかりであるが、さらに、国際交流活動を通じて、高まり発展していく。「緑の国際交流活動」は、今、世界に向けて大きな歩みを始めている。





第十九回・明日の岡崎を考える

岡崎の市民大学

◆会場 岡崎市民会館大ホール

◆会費 一、二〇〇円

◆申し込み 七月二日より

◆期日・講師

①七月二十六日(日) 十時

「家康に学ぶこれからの日本」

関西大学名誉教授

谷沢 永一

②八月一日(土) 十四時

「生きものに学ぶ」

基礎生物学研究所教授

江口 吾朗

③八月八日(土) 十四時

「世界の中の日本」

評論家 森本 哲郎

④八月二十二日(土) 十四時

「歴史の嵐と葦たち」

作家 澤地 久枝

⑤八月二十九日(土) 十四時

「動物にみる思いやりの行動学」

元上野動物園長 中川 志郎

⑥九月十九日(土) 十四時

「現代社会の底流にあるもの」

評論家 草柳 大蔵

■多年動続表彰

- ・林 和泉(大樹寺小)
- ・中山 昌司(六名小)
- ・澤 博史(生平小)
- ・杉浦 正明(常磐東小)
- ・青木 宏氏(常磐南小)
- ・後藤 晶基(東海中)
- ・松井 幸彦(奥殿小)
- ・浅井 昭二(矢作南小)
- ◆申し込み 七月二日より
- ◆期日・講師
- ①七月二十六日(日) 十時
- 「家康に学ぶこれからの日本」
- 関西大学名誉教授
- 谷沢 永一
- ②八月一日(土) 十四時
- 「生きものに学ぶ」
- 基礎生物学研究所教授
- 江口 吾朗
- ③八月八日(土) 十四時
- 「世界の中の日本」
- 評論家 森本 哲郎
- ④八月二十二日(土) 十四時
- 「歴史の嵐と葦たち」
- 作家 澤地 久枝
- ⑤八月二十九日(土) 十四時
- 「動物にみる思いやりの行動学」
- 元上野動物園長 中川 志郎
- ⑥九月十九日(土) 十四時
- 「現代社会の底流にあるもの」
- 評論家 草柳 大蔵
- 多年動続表彰
- ・林 和泉(大樹寺小)
- ・中山 昌司(六名小)
- ・澤 博史(生平小)
- ・杉浦 正明(常磐東小)
- ・青木 宏氏(常磐南小)
- ・後藤 晶基(東海中)
- ・松井 幸彦(奥殿小)
- ・浅井 昭二(矢作南小)
- ・梶尾 長夫(六ツ美北部小)
- ・平野 有行(甲山中)
- ・柴田 敏希(根石小)
- ・鈴木 忍(三島小)
- ・村松 裕(竜美丘小)
- ・大山 一男(山中小)
- ・植田 和子(細川小)
- ・佐野 達介(大門小)
- ・市川 直昭(矢作西小)
- ・菅沼 剛(上地小)
- ・竹川 正彦(小豆坂小)
- ・山内 博史(北野小)
- ・石原 博文(南中)
- ・岩間 長生(河合中)
- ・金澤 強(矢作中)
- ・近藤 正代(六ツ美中)
- ・本多 弘子(六ツ美中)

■平成三年度全日本学校関係緑化コンクール

学校環境緑化の部
特選・文部大臣賞

・日本放送協会会長賞

矢作西小学校

■第三回松下視聴覚教育研究賞
文部大臣賞

■フラー・ブラボー・コンクール・春花壇

優良賞

福岡小学校

■第十八回視聴覚教育研究助成

連尺小学校
細川小学校
上地小学校
北中学校

第三十六回岡崎市中学校・総合体育大会の記録

※水泳は、八月号に掲載します。

○種目別順位

種目	性別	会場	優勝			
			2位	3位	位	
陸上競技	男子	県営	南	矢作	竜海	
	女子	北	竜海	常磐	城北	
バスケットボール	男子	南	甲山	竜海	新香山	
	女子	北	竜海	城北	葵	
バレーボール	男子	中央	東海	矢北	六ツ美	矢作
	女子	合	東海	常磐	南	矢作
ソフトテニス	男子	県営	矢作	新香山	美川	常磐
	女子	中	矢北	常磐	葵	竜南
卓球	男子	欠	欠	北	岩津	竜南
	女子	欠	欠	北	岩津	六美北
体操	男子	北	甲山	竜海	甲山	
	女子	中	矢北	竜海	甲山	
新体操	男子	北	東海	甲山	竜海	
	女子	中	東海	矢北	竜海	
剣道	男子	北	東海	矢作	六ツ美	新香山
	女子	中	竜南	常磐	新香山	北
ハンドボール	男子	葵	葵	城北	美川	六ツ美
	女子	中	新香山	葵	美川	北
軟式野球	男子	県営	竜海	新香山	北	美川
	女子	甲山	城北	矢作	城北	葵
ソフトボール	男子	中総体育館	竜南	竜海	北	
	女子	県営	矢中	新香山	矢作	甲山

○体操競技

女子	氏名	校名
個人総合	斉藤 一成	竜海
床運動	片桐 祐介	甲山
鉄棒	鈴木 貴志	甲山
跳箱	斉藤 一成	竜海
女子	氏名	校名
個人総合	水越恵美子	矢作北
床運動	水越恵美子	矢作北
平均台	水越恵美子	矢作北
跳箱	迫山あゆみ	六ツ美北

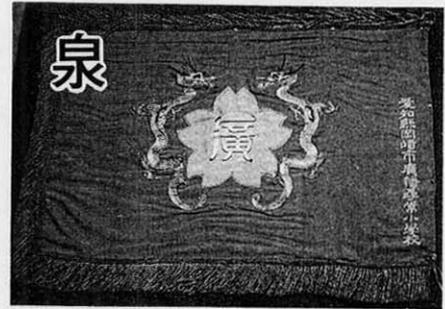
○柔道

附級	氏名	校名	階級	氏名	校名
軽量級	山田 智	竜海	中量級	松山 修	竜南
軽中級	榊原 真志	北	重量級	小野寺 忍	竜南

○陸上競技

男子	氏名	校名	記録
1年 100m	本多 典克	東海	12"4
	服部 和彦	竜南	11"6
	杉浦 広高	南	23"8
	市川 学	矢作	53"8
800m	牧田 晃叔	竜海	★2'03"8
	林 邦彦	福岡	★4'41"6
2年 1500m	井坂 領斗	美川	★4'28"3
	高井 淳	東海	★9'33"1
110m H	杉浦 航	甲山	16"8
800m R	杉浦・奥田	南	1'37"5
	乾・天野義		
低 400m R	川澄・山田	竜海	★ 49"0
走 幅 跳	服部 和彦	竜南	6 M22
	北浦 武	矢作	1 M75
走 高 跳	岩柿 友明	南	12 M76
砲 丸 投	渡口 賢隆	南	☆3 M50
女子	氏名	校名	記録
1年 100m	鈴木 智実	竜南	14"0
	菊地美由紀	矢北	13"1
200m	高橋 穂波	矢北	★ 26"0
	小倉 礼子	竜海	★2'24"6
1500m	下釜 郁代	常磐	★4'57"8
100m H	山内 三佳	北	16"3
	川口・高橋	矢北	★ 51"0
400m R	大恵・菊地		
	高金原・山本	矢作	54"8
低 400m R	上野・西川		
	岩月 千佳	城北	5 M05
走 幅 跳	魚野 愛子	矢北	1 M45
走 高 跳	岡田 陽子	矢北	11 M11

★一大会新記録 ☆一大会タイ記録



広幡小学校

校 旗

現在、小中学校における入学式や卒業式などの儀式において、学校の象徴でもある校旗が壇上に飾られているのを目にするのが多くなった。

明治三十年代から学校制度の整備がなされ、初等、中等、高等と各種の学校が明確に位置付けられた。また、明治四十年には、尋常小学校の教育年限を六年間とし、義務教育年限が二年延長され、六年間の義務教育が確立した。

て、市立尋常小学校として、梅園、連尺、広幡、投（今の根石）、三島の五校が創立された。ここに紹介する校旗は、岡崎市立広幡尋常小学校の校旗である。同校の記録によれば、大正十一年十一月に受納されており、恐らく校旗としては最も古いものではないかと思われる。丹念に金糸の刺繍がなされ、当時としてはかなり高価なものであったと推察される。

今は、広幡小学校の資料室に大きなガラス張りの額に納められ、大切に保管されている。

大正五年七月一日、当時の岡

崎町に市制が施行され、前後し

・表紙写真
・表紙詩
・カット

梅園小 梅園小 早川 正春
梅園小 高橋 優美子
河合中 相川 たくみ



* 風の暦	高橋 治	
新潮社		¥1030
* 親が知らなかった 子の愛しかた	佐々木隆三	
青春出版社		¥1100
* 真夜中の喝采	向井 敏	
講談社		¥1500
* マンボー氏の 暴言とたわごと	北 杜夫	
新潮社		¥1050

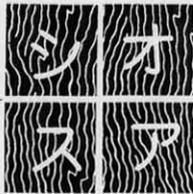
※森に育てられて 稲本 正
徳間書店 ¥1800

豊かな生活の一方で、温暖化・酸性雨・森林伐採など、地球環境の現状が今や世界的問題として浮上してきた。自然環境保全に、私たちに何ができるか。

「自分が森に育てられている」という謙虚さをもって自然の豊かさ・深さ・偉大さを実感する。「百年かけて育った木で百年使えるものを、一本伐ったら一本植える、子供一人どんぐり一粒」。

飛騨高山から森と木と自然と人間とをグローバルにみずみずしい感性で訴える。

雄々しい姿の選手入場行進で始まった第三十六回岡崎市中学校総合体育大会は、参加中学それぞれの工夫を凝らした応援合戦とともに、ミニ国体をも感じさせた。陸上競技の部では、数多くの新記録も出て、大変な盛り上がりを見せ、三河健児ここにありと、その意気を天下に示した一日であった。



三味線の音がいかにも似合いそうな見事な日本庭園を前にして、民謡の池田さんは、年齢を感じさせない元気な声で、過去と現在、そして未来を熱っぽく語られた。女性でありながら幾年も町総代を務めてこられたという。その強い信念のもとに、今、古い民謡からの脱却を試みておられる。

朝、学校に着くと、真っ先に運動場真ん中辺りを見る。今日もモグラは健在で、せっせと大事なテニスコートの土を掘り返したようだ。ネズミ掘りを仕掛けても、そこをよけて通る利口なモグラ。運動場など掘り返しても、好物のミミズなどいないであろうに。職員室はモグラ掘り作戦会議が開かれる。

鮎詰め状態の電車が駅のホームの壁に激突し、死傷者を出した大惨事が起きた。こういう事故が起きる度、人間の死は、運命によって決められているのだろうかと思う。一両目に乗らなければ…。もう一本運らせていれば…。残された遺族はそう思うに違いない。時を戻したいと思うことがある。